

「プロフェッショナル」とは

企業経営漫談士 岡野実空

“professional” 英和辞典の解説は、1. (知的)職業人; 専門家(はだしの人) 2. 職業選手、プロ、くろうと。また元々は、信仰を公言した聖職者のこととか。しかし、「装う」「称する」などという“profess”の意味を読むと、一時華々しくマスコミに登場していた「プロ経営者」なる人種が、あっけなくコケてしまうことに「ガッテン！」。

今回のコラムは、「プロフェッショナル」の意味や条件を、私たちが日常類語として使っている「スペシャリスト」「エキスパート」と対比しながら考えます。

条件1: 専門性

まずは「スペシャリスト」との共通部分から。

同じことを趣味や余技として行うアマチュアとの対比を考えれば、真っ先に上がる条件は「専門性」。

フリージャーナリストして大活躍中の池上彰氏が、NHK を辞めたきっかけは、「専門性」がないという理由で、解説委員への道を閉ざされたこと。視聴者にとって難解なことを、極めてわかりやすく『伝える力』を「専門性」と認めない幹部の先入観が、それを外部で開花させることにつながりました。いまや古巣の番組でも活躍している姿からは、単に固定観念の恐さだけでなく、さまざまなマネジメント上の教訓を引き出すことができます。

条件2: 生産性

続いては、「エキスパート」との共通性。専門家の中のさらなる熟練者。すなわち、ある技能が非常に優れていて、なおかつそれを手際よくこなす人たち。より具体的には、標準の手順に沿った「能率」や、労力や資源のムダのない投入でロスを出さない「効率」など、業務に関する高い「生産性」を実行、実現できる人たちです。

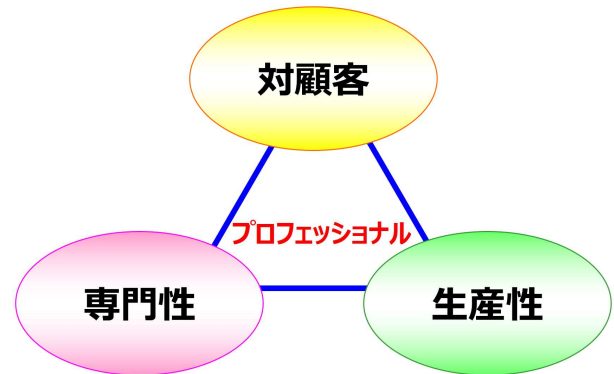
しかし、テニスやゴルフなどのオープン大会は、いまだに「プロ」だけの競技より権威が上。それは歴史や伝統だけでなく、職業的な「効率」とは相いれない、「純粹」な精神を有するアマチュアの参加を、社会がより高く評価しているからです。

訳もなく「生産性向上」を叫ぶ、いまの政財界トップに欠落しているものは、世の中それだけでは成り立たっていないというパラノイア感覚です。

条件3: 対顧客

意外に見落とされていますが、「スペシャリスト」や「エキスパート」と「プロフェッショナル」を分けるものは、「顧客」との関係。顧客に貢献する「専門熟練者」が、「プロフェッショナル」です。

KM0-21 「プロフェッショナル」の条件



ノーベル文学賞がきっかけで読んだカズオ・イシグロの代表作、『日の名残り』。主人公の執事は、「プロ中のプロ」。その奥深い心理描写を、はたして表現できるのかという興味で観た、映画版。それを見事に演じきった、アンソニー・ホプキンス。そしてなにより、原作を書いたイシグロ氏も皆、真の「プロフェッショナル」。原作小説、映画ともに、「顧客満足」が得られるのは稀であることを考えると、それを生む「プロ」たちの凄さを実感します。

またミドルの皆さんに、この作品をお薦めするもう一つの理由は、その「主題」。執事が頻りに語り、その主人がつねに言動で示す“integrity”こそ、ドラッカーがしばしば強調した「品格」「真摯さ」。それは学ぶことができないと、氏は生前断言しましたが、この両作品はその例外といえます。

これまで上げた「プロ」3 条件の判定者は、すべて「顧客」。それらを総合して「顧客」に選ばれるか否か？ 仮にそれらの「能力」が同等なら、その最後の判定ポイントは、「真摯さ」。「プロ」としての「技能」とともに、それを磨き続けましょう。

「ミドルニ告グ！一、今カラデモ遅クナイカラ技能ト真摯サヲ学ベ。一、顧客ニ選バレナイ者ハ全部逆賊デアルカラ首ニスル。一、オ前達ノ家族ハ社賊トナルノデ皆泣イテオルゾ。」MCN 戒厳司令部

2019年7月13日(初出平成30年2月12日) 実空